

日本でもマレーシアでも、私たちは、日々食べる肉類や野菜類をはじめとして食品を、スーパーマーケットや食料品店などで、現金にせよカードにせよ、貨幣との交換によって手に入れる。現代社会に生きるかぎり、食品の購入は、あたりまえ

知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第10回】
奥野克巳（桜美林大学教授）
サラワク州の狩猟民にみる

人間と動物

すぎて、疑ってみたこともないような事実である。それに対して、マレーシアには、自分たちの食いぶちを、ほとんど自給している人たちもいる。

サラワク州(ボルネオ島)奥地のブラガ川上流に定住・半定住する(元)狩猟民・プナン人は、そう

食料自給するプナン人は結果的にヒト中心主義に陥るのを逃れている

いった人たちである。元というのは、彼らは、今では焼畑の手法を学んで、粗放的な農耕を行っているからである。しかし、現在にいたるまで、彼らの生活の中心には、狩猟採集がある。



狩猟キャンプの朝は、残りの食料がない場合、その日の食いぶちを、誰と誰がどの方面に探しに行くのかを割り当てることから始まる。男たちは、ライフル銃や

吹き矢を持って狩りに出かけ、女たちは、川に魚獲りに出かけるという具合だ。

ハンターはふつう、黙って、狩りに出かける。キャンプのメンバーも、ハンターたちには、何も声をかけない。ハンターは、長時間歩き回っても何の獲物も取れなかった場合には、そのことを知らせるために、<ぼやきことば>を唱えながら、キャン

プに戻って来る。逆に、獲物があるときは、何も言わずにキャンプに帰り着く。イノシシ、シカ、サル、ヤマアラシ、リス、トリ……、森の動物であれば、彼らは何でも食べる。獲物は、すぐに解体され、料理される。そのようにして、日々、プナン人は、動物の殺害と死に直面する。

私は、プナン人が、けっして言葉では表現しないが、狩猟が、人間が動物の命を一方的に奪う行為であるということをよく知っていると思う。プナン社会には、動物をからかったり、いじめたりしてはいけない、とりわけ、動物の解体中に、それらと戯れてはないというタブーがある。そうしたタブーを犯すと、雷神が怒って大雨や嵐を起し、稲妻で人を打つことを、彼らは極度に恐れている。それらは、プナン人にとって、最大の自然の脅威である。自然災害が起きないことを願って、つねに、動物にまつわるタブーを犯さないように注意を払う。

そうしたタブーとは、動物に対して、人間の側のエゴだけでふるまってはいけないという、古くから言い伝えられている掟のようなものである。プナン人は、掟を守って、人間と動物の間に対等な関係を維持することによって、動物を一方的に飼育・管理し、食品偽装などへと至るようなヒト中心主義に陥ることを、結果的に防いできた。私たちは、マレーシアの辺境の人びとの暮らしを知ることによって、現代社会の「食」の仕組みとその問題だけではなく、現代世界が抱える諸問題を再検討する手がかりを得ることができるのではないだろうか。

【執筆者プロフィール】1962年滋賀県生まれ。一橋大学大学院社会学研究科修了。社会学博士(社会人類学)。著書に『「精霊の仕業」と「人間の仕業」-ボルネオ島カリス社会における災い解釈と対処法』、『帝国医療と人類学』、共編著に『文化人類学のレッスン』、『医療人類学のレッスン』など。